2007-01

札響くらぶ

第38号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）

日本プロオーケストラファンクラブ協議会

設立会議開催

以前より札響くらぶが中心となり、全国のプロオーケストラファンクラブの連携と情報交換を呼びかけていたファンクラブ協議会が、いよいよ第一歩を踏み出しました。

11月11日、札響定期演奏会後、まだ熱演の興奮が冷めやらぬ中、キタラ２階の大会議室において設立会議が開催されました。我々札響くらぶの他、仙台フィルハーモニークラブ(以降ＳＰＣ)、山響ファンクラブ、群響を応援する県民の会、広響フレンズの面々が、定期演奏会を一緒に鑑賞し、この会議に参加しました。

会議は上田文雄札響くらぶ会長の歓迎の挨拶に始まり、議長に選任された鈴木美保札響くらぶ副会長の司会のもとに進められました。最初に西川吉武札響くらぶ副会長より「協議会会則(案)」が提示されその際、今回の発足についてはゆるやかな会則でスタートし、細かな点については次年度以降の話し合いによってつめていきたいとの説明があり、拍手をもって承認されました。

次に、会長、副会長の選出を行い、上田札響くらぶ会長がこの協議会の初代会長に、ＳＰＣ会長と山響ファンクラブ会長が協議会副会長になることが了承されました。また、要請のあった群響県民の会、広響フレンズについては、現在のそれぞれのクラブの体制では副会長としての役割がはたせるか疑問なので、もう少し様子を見たいとの申し出があり了承され、幹事に就任することになりました。会長就任挨拶、副会長就任挨拶の後、上田会長より西川札響くらぶ副会長に幹事長の指名があり承認されました。

さらに、どのファンクラブからも、この協議会には積極的にかかわっていきたいとの確約を得ました。次に、西川幹事長より各クラブから幹事を選出し連絡を取りながらこの協議会を運営すること、次年度は仙台で第１回総会を開催することの提案があり、これが承認され議事を終えました。

最後に、上田会長より「ここに、日本プロオーケストラファンクラブ協議会を設立したことを宣言させていただきます」という、力強い言葉のもとに、設立会議は終了しました。

会議終了後に行われた交流会の様子は８ページに掲載します。あわせてご覧ください。

札響くらぶは札響を愛する人達の札響応援団です

音楽監督に聞く

三年目は一回一回 質の高い演奏会に!!

尾高 忠明（おたか ただあき） さん

札幌交響楽団音楽監督

©MASAHIDE SATO

尾高忠明さんのプロフィール

1947年、作曲家・指揮者尾高尚忠の次男として鎌倉に生まれる。桐朋学園大学で斎藤秀雄氏に師事。卒業後N響を指揮してデビュー。ウィーン国立アカデミー留学後東京フィル常任、札響正、読響常任、ＢＢＣウェールズ響首席、紀尾井シンフォニエッタＭＡ・首席の各指揮者を歴任し、98年札響ＭＡ・常任指揮者に就任。04年５月からは札響で二人目となる音楽監督に就任。

国内の主要オーケストラは勿論、ロンドン・フィル、ＢＢＣ響、バーミンガム市響、ハレ管、ポーツマス響、ヘルシンキ・フィル、ロッテルダム・フィル、ストラスブール・フィル、バンベルク響、ワルシャワ・フィル、オスロ響、ベルゲン・フィル、メルボルン響、シドニー響、オレゴン響、香港フィル、ロンドン響等に客演。着実に日本人指揮者のリーダー的存在へ歩を進めている。

サントリー音楽賞を受賞の他、ウェールズ音楽演劇大学名誉会員、ウェールズ大学名誉博士号、大英勲章ＣＢＥ、エルガー・メダルを授与されている。

東京芸大非常勤客員教授も務めている。

06年12月14日、キタラでの「ファースト・コンサート」の昼休みに、今年も音楽監督の尾高さんに07年度定期演奏会について伺いました。プログラミングの構想と全10回の指揮者、ソリスト、曲の聴き所等について解説していただきました。

07年度のプログラミングの構想は

定期公演を２回にした時に、名曲で良い演奏をしてお客様に来ていただこう、ということがありましたが、２年目の今年は、あまり有名ではない曲も、本当に良い曲ならばやってみよう、ということでやってみました。

すごく心配はしていましたが、ご存知の通り、バボラークとかパユというような凄い連中が来てくれたこともありまして、11月定期は両日完売になり、これは日本中で話題になっていまして、嬉しいと感じると共に、この先が大変だなと思いながらこのプログラミングを考えてきました。プログラミングのプロセスは今までとそんなには変わりませんが、大きく違うのは事務局に宮下君という優秀な人材が大阪フィルからいらして、より幅広いアイディアも生まれるようになったという点です。

全体が良い演奏会になるには、結局は一つ一つの演奏会が良いものでなくては、ということがありまして、毎回がクオリティーの高いもので「これはぜひ聴かねば」と思っていただけるようなものを並べる必要がある、というのが３年目に当っての基本的考えです。そんな中で、この人にはぜひという凄い人達が、運良くと言いますか、皆さん快く引き受けて下さいましたので、かなり思い通りのものになったのではないかと思います。

07年度は毎回素晴らしく、どれか一つを選べと言われても難しいですね。ぜひ多くの方に定期会員になっていただきたいと思っております。

各回の解説をお願いします

４月の広上さんは何度も客演して下さっており、オーケストラとも相性が良くて、日本の中堅指揮者では大野君と並んで外国での活躍が目立ちます。私の兄の弟子なので昔から知ってましたし、何のてらいもなく身体から音楽が流れてくるというユニークな指揮者です。私も彼も東京芸大で教えており、この間は彼が教えている東京音大のオケも指揮しましたが、私も彼も教育ということが凄く大切だと考えており、そういう点で意気投合しています。今日本

で一番話題の人であり、外国にポジションを持った人ですから、オープニングに一番ふさわしい人です。

「幻想交響曲」をやっていただきますが、彼のバイタリティー、潑剌さがどんな具合に発揮されるのか、ちょっと想像出来ないことになるのではないかと思います。それぞれの指揮者の「幻想」の良さがありますが、広上君はそれらを破る程の未知数の魅力があると思います。「シチリア島の夕べの祈り」序曲は、彼に一番向いていて、オープニングに一番ふさわしいと思いますし、玉木君という素晴らしいテューバもいますので「幻想」はきっと名演になるだろうと思います。

日本人のピアニストは数多く出ていますが、外国に行った時、弦楽器奏者に比べるとそれほど評価が高くありません。その中で小菅優さんは国際級で、凄い人が出て来たなと思いますが、広上君と協調かバトルか分かりませんが、すごく楽しみです。

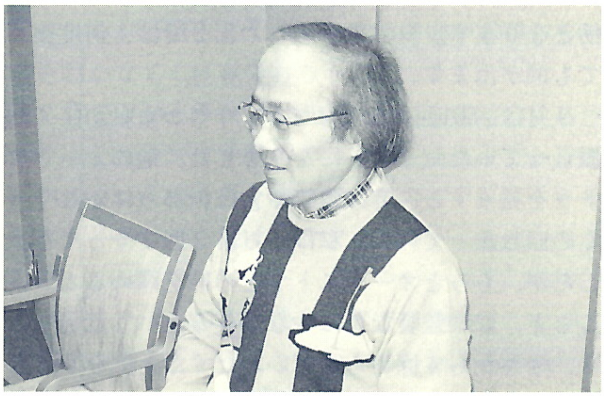
ヴェルディとベルリオーズの間にベートーヴェンというプログラムは私なら組みません。しかし、それは私の性格からきているもので、こういうプログラムでやるというところが、広上さんならではの魅力ということではないでしょうか。

5月は正指揮者の高関さんですが、高関さんはご存知の通り、良い意味でマニアックな面があり、譜面を調べることといい、物事を知っていることといい、単に指揮が上手ないい指揮者というよりは学者肌の人柄です。更に、高いテクニックを持っているので、オーケストラにとっての難曲をまとめてくれるのにふさわしい人です。

バルトークの「オーケストラのための協奏曲」はオーケストラにとってはとても怖い曲の一つで、一般的にはそのオーケストラの常任指揮者などでやられます。私も好きな曲ですが、今回はぜひ高関さんにやってもらい、オーケストラとの関係も非常にいいので、第2楽章の室内楽的な部分なんかは家庭的な凄くいい演奏になるものと期待しています。

メンデルスゾーンの「静かな海と楽しい航海」は日本ではあまり知られていませんが、私はこの曲はメンデルスゾーンの傑作中の傑作だと思います。静かな航海の出発から始まり、描写なんだけれどもそれが純音楽としても美しい。コンサートをスタートするにふさわしい、とてもきれいな曲です。

ハイドシェックさんは、私も一緒にやりたかったピアニストです。今回登場する中では、マリナーさんと並んでちょっとお年のファンなら誰もが知っているという少し前までのビッグスターです。ご高齢ですが、未だに矍鑠として素晴らしい演奏を続けておられるということですので、他にも聴いてみたい曲がありましたけれど、やはりハイドシェックさんといえば、例えばカール・ベームの何とかと言われるようなもので、やはりモーツァルトだと思います。モーツァルトの曲というのは、子供のような若い人か高齢の方が良い演奏をすると言われています。まあ、年を取ると子供に返っていくということなのでしょう。若い人と高齢の方の中間の世代には出せないモーツァルトを聴かせていただけると思います。



6月は500回記念になります。まだ500回かと言う人もいるかもしれませんが、長い歴史です。私が初めてここの定期を振ったのが150回でした。それからもう350回が経っています。

世界中のオーケストラで、何か大事な出来事や節目にはマーラーの第2番「復活」が演奏されています。500回記念としては「復活」程ふさわしい曲はないと思います。ここ数年、外国で何度もやっていますが、その度に素晴らしい作品だと思います。実はその時に一緒にやったのがビルギット・レンメルトです。名前は知っていましたが、実際に一緒にやってみてびっくりしました。マーラーに精通しているし、声も凄いし、音楽も凄い。ピアノ合わせの時に、ビルギットがどこの人かも分からないで付き合ったのですが、ドイツ語がとてもきれいで「ドイツ語がいいね」と言ったら「私ドイツ人です」と言われてしまいました。とにかく凄い人で、2009年には向こうで一緒に「大地の歌」をやることも決まっています。「復活」をやるに際し、ぜひ来てもらいたいと思いましたが、とてもえらい人ですし世界中から引っ張りだこの人で、完全に10日間程は私たちのために空けてもらうことになりますので、来てもらえるか心配しましたが、話してみたら「喜んで行く」と言ってくれました。ソプラノの松田さんは、良いということは聞いていましたが、実際に聴いたこと

がありませんのでＣＤを何枚も聴きました。すると、かなりドラマティックで太い声で、ビルギットがとても太い声なので、細い声では合わないと思っていましたから、これならばと思いました。ビルギットにも「こういう人だがどうだろう」と言いましたら喜んで一緒にやりたいということでした。

もう一つ楽しみなのは、今年出来た札響合唱団が「第九」でデビューした後、初めてそれ以外の曲でデビューすることになることです。合唱は５楽章の最後の方にしか出てこないのですが、それまでは様々な内容があり、実は合唱の歌い出しで本当の復活となります。あの歌い出しの部分では、何度振っても涙が出ます。

９月は、501回になりますが、今年から私が年４回振らせていただくことになりました。他のオーケストラを見ますと、音楽監督や常任指揮者はかなり多くの回数振っていて、私はずっと３回でやってきましたが、もっとオーケストラとの絆を深めるということと、音楽監督なのに少な過ぎるという意見もあり、今年から４回やらせていただくことになりました。

３回の時は、どうしてもマーラー、ブルックナーや英国物という傾向になり、それ以外のところが少なくなっていました。昨年２日公演になった最初にチャイコフスキーの６番「悲愴」をやりましたが、実は４番や５番はもう何十年もやっていません。９月をどうしようかと考えた時に、私自身かつては多くやっていた５番を何十年もやっていないので、当時とは違う５番になるのではないかと思い、いっそオール・チャイコでいってみようと思いました。定期でのオール・チャイコというのはめったにありませんが、昔札響のチャイコフスキーというのは定評がありましたし、今の私と札響のチャイコフスキーというものを確立したいと思いました。

「地方長官」という曲は、曲の存在は知っていたけれどやったことはありませんでした。何年か前にマンチェスターのＢＢＣと、この曲をやりました。その時のコンマスが親しいロシア人で、この曲のことをよく知っていて、食事しながらも色々な話を聞かせてもらい、結果としてとても良い演奏になりました。それがラジオで放送されたら、ロンドンの方で評判になり、ＢＢＣの「ミュージック・マガジン」にも私の演奏が入りました。日本ではほとんどやられることのない、難しい曲ですが、ぜひ楽しんでいただきたいと思います。

「弦楽セレナード」は思い出深い曲で、斎藤秀雄先生が余命一月もないという時に、合宿に来られて教えて下さった曲で、３楽章のエレジーで「これは人が死んだ時の弔いの歌だ」とおっしゃったので、皆泣いてしまい、合わなくなってしまいました。昔だったら絶対に怒るところですが、怒らないでにこっとされて「いいよ、心で歌いなさい。心で歌って合わなくなってもいいんだよ」とおっしゃった。私にとって斎藤先生との最後の接点の曲です。この曲をやる度に泣いてしまいますが、実は、私は札響ではやっていません。札響の演奏で斎藤先生の「心で歌え」というのを聴いていただけたらと思います。

10月はネヴィル・マリナーさんです。私は東フィルで何度もマリナーさんをおよびしています。まだお若くて「惑星」とかいろんな曲を振って下さいました。その後、お年をめしてあまり外国には行かなくなったと聞いていましたが、最近は体の調子も良いと聞きましたので、ダメモトでもと思って言ってみました。すると、来て下さるというので、これはもうびっくりしました。

何をやっていただくかいろいろ考えましたが、先生ご自身が「シンフォニックな曲をやりたい」ということでしたので、メンデルスゾーンが一番いいだろうということになりました。３番の「スコットランド」をやっていただきます。

また、ヴァイオリンのシュタインバッハーさんは先生にご紹介いただきました。マリナーさんが振った時に都合の悪くなった人の代役で弾いたそうで、マリナーさんはびっくりして、こんな凄い人がいるんだ、ということで以後何度も共演しているそうです。

マリナーさんとシュタインバッハーでのベートーヴェンとメンデルスゾーンという純音楽で勝負というのに、札響がどこまで応えられるか期待していただきたいですね。

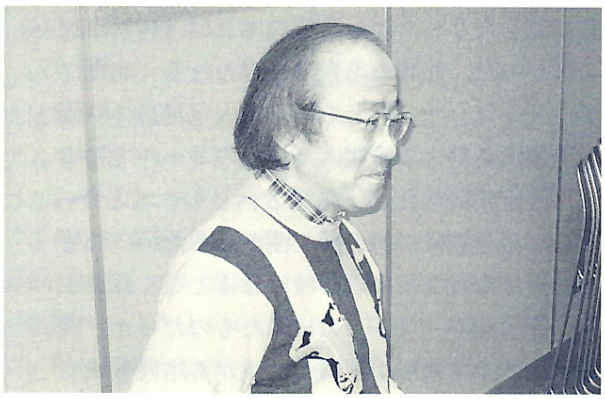
11月は東京公演も一緒になりますが、ポール・メイエさんはパユさんなんかとクインテットをやっていて、私も聴いてみてメイエさんが本当に凄いと思いました。

昨年オール武満をやった時に多くの人から「どうして東京で武満をやってくれないんだ」と言われ、東京でオール武満はどうかなと思い、今回武満さんが最も影響を受けたドビュッシーとのプログラムとしました。今、チェロのセクションが良くなっているので、チェロが活躍する「海」をメインにしました。「牧神の午後への前奏曲」も名曲ですし、その二曲の間に武満作品を入れました。武満さんの二曲は

私が初演した曲です。ここで堀米さんとメイエさんの完璧な演奏を聴いていただけると思います。

12月は前回も好評だったボッセさんです。指揮者の中でもお年をめした方の演奏というのは、何物にも代え難いと思います。朝比奈先生もお亡くなりになる直前まで「僕は今日ちゃんと振った。君もあと40年ちゃんと振りなさい」とおっしゃいました。

今回はそのご高齢のボッセさんに、オーケストラの原点というべきハイドンをやっていただきます。「朝・昼・晩」という三曲のシンフォニーはいろんなソロが出て来たりして、非常に面白いんです。ただ6・7・8番だけでは一つの演奏会としてはちょっと短い。そこで、福田さんという名手に「展覧会の絵」やマーラー 5番を吹いてもらっていますが、定期できちんとコンチェルトをやってもらわなければ、とずっと思っていましたので、この機会にと思



いました。ただ、問題はボッセさんが3交響曲と一緒に協奏曲をやって下さるかということでしたが、喜んでやって下さることになり、きっと心が洗われるような美しい、そして楽しい演奏会になると思います。

1月はまた高関さんの登場です。

ジョン・ケージは武満さんと一番親しかった作曲家ですが、結局二人は全く別の世界に行きました。あれだけ違う世界にいて、それであれだけ親しかったのは、いいなーと思います。そのケージの作品から「四季」を選ばれましたが、マニアックな高関さんならではというところですが、難しい曲をどのように作品として披露してくれるのか、私もこの定期は聴いてみたいですね。

協演のウィスペルウェイは素晴らしいチェロですが、うちの首席の石川祐支君が最も尊敬するチェリストです。前から一度よんで下さいと言われていました。どんな曲をやるのかなと思っていたらルトスワフスキで、これはまさに高関さんにぴったりの曲です。高関さんに向いた曲を、凄いチェリストにやっていただくという、まあ、この前半はマニアックな上にもマニアックという感じですが、皆さん敬遠なさらずに聴いていただければ、面白いですから堪能していただきたいと思います。

後半は大スペクタクルと言われる「ツァラトゥストラはかく語りき」です。Kitaraにはせっかくオルガンがあるのだからオルガンの入る曲をということですが、オルガンは前半だけです。しかし、その前半のオルガンの大音響とオーケストラの大音響のせめぎ合いは凄いと思います。またこの曲では、トランペットが活躍しますが、名手福田君が素晴らしい音を聴かせてくれるであろうと思います。

2月ですが、ラツィックさんというのはウィスペルウエイとコンビを組んでいるピアニストで、ウィスペルウエイのCDを聴いて「このピアニスト」を気に入りまして、続けて呼ぼうということになりました。

ブルックナーの9番はPMFではやりましたが、定期でやろうということになりました。この曲は私にとっては一番大事な曲です。私の父が最後に振ったのはN響の定期で、その時にこの9番をやりました。そのことを母に聞いて、どんな曲かと思って、レコードを探して聴いた時に衝撃を受けて、それ以来私の一番大事な曲になりました。桐朋に入ってからもずっとレコードを聴き続けて「デビューは絶対これでやるぞ」なんて思っていました。でも、N響も東フィルも全然相手にしてくれなくて、実際に振ったのはずっと後になりましたが、実はまだ大学3年でN響の指揮研究員だった時に、病気のマタチッチ先生の代役で練習で振ったことがあります。それも暗譜で。中学生の頃からずっと勉強していましたから。あのN響の皆さんが唖然として、そしてあんなに喜んでくれたことはありませんでした。

3月は小林研一郎さんの「我が祖国」です。小林先生は芸大の教授で、私も客員教授で職場の仲間です。東欧圏でご活躍になり、チェコフィルが喜んでまた来てほしいと言ってよばれた、という話を聞いて凄いなと思いました。その後、「プラハの春」によばれて、それまではチェコ人しか振っていなかった「我が祖国」の演奏に白羽の矢が立ったと聞いて正直びっくりしました。「我が祖国」を日本人が振るというのは画期的だし、快挙と思いました。私はコバケンさんが振ってくれるなら「我が祖国」と決めていました。きっと、素晴らしい演奏で締めくくって下さると思います。　（佐藤良次）

札響物語　37

さようなら札幌市民会館　1

1958年に落成した札幌市民会館が、今春札幌市民の前から姿を消す。開館当時、東北、北海道で規模も機能も最も豪華なホールだった。この立派な札幌市民会館が誕生したことで、札幌交響楽団を作る機運が急上昇したのかな、とも思われる。

1960年９月から約１ヶ月間の藤原歌劇団の歌劇「カルメン」公演のオーケストラの１員として東北を廻って札幌へきたのだった。東北にはカラヤン、ベルリン・フィルで柿落しをして全国的な話題になった、郡山市民会館があった。実際は粗末なホールだった。

北の都札幌は街も整然と美しく、市民会館は近代的なデザインで規模も大きく、市民会館に到着してもしばらくは中に入らないで「札幌市民会館」のネームプレートを見上げていたものである。更に、このツアーで初めてのオーケストラ・ピットでの演奏だった。札幌の聴衆は耳も肥えているからと、指揮者ガエタノ・コメリーの申し入れで、札幌の初日の前に練習をやり直した。

札幌市民会館が開館して３年目に、札響が産声を上げた。1961年９月６日に創立披露演奏会があり、初めてステージへ上がった。ステージは思いのほか奥行きが無かった。そしてオーケストラの楽員が座る椅子も足りなかった。いまでは笑い話で済むが、その時はあせった。「椅子を貸してください」札響の創立披露演奏会は楽団員が座る椅子の調達から始まった。創立披露演奏会は、超満員の聴衆の熱気にあおられて舞台の上も熱演を通り越していささかオーバーヒートした感がある演奏だった。それ以来、毎月市民会館での定期演奏会を続け、この狭い奥行きを現在のサイズに広げる工事をする期間は600席しかない共済会館に一時、定期演奏会を引っ越したりしたが、札響の本拠地は札幌市民会館だった。札響の準定期と言われる「北電ファミリーコンサート」も、当時人気絶頂の映画評論家、荻昌之の解説入りでこのホールで始まった。定期演奏会と「北電ファミリーコンサート」が毎月札幌市民会館で開かれるため、札響の団員は市民会館に居る時はなんとなく我が家にいるようでリラックス出来たものだった。楽屋が小さくて楽屋から舞台に上がる階段も狭く楽器をぶつけそうな出入りだったが、客席も長い斜面でてっぺんからステージまでの距離が遠くと、あれこれ不満を聴かされるホールだったが、客席でも、演奏者にも音の良いホールだった。この音の良さに、札響は育てられたのである。お世話になりました。

有難う札幌市民会館！札響はこれまでの思い出を未来永劫忘れません。　　（竹津宜男）

from 「札響くらぶ」

テラスレストラン・Kitaraの特典

3,000円のキタラ・スペシャルコースと、5,000円のフルコースをご注文の際に、札響くらぶの会員カードをご提示いただくと、10%の割引にプラスして、グラスワイン（赤、白）のサービスをいたします（3,000円のキタラ・スペシャルコースは、札響の公演の日によく注文されるメニューです。）。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　第２ヴァイオリン首席奏者

大森（おおもり） 潤子（じゅんこ） さん

ご出身は

生まれは千葉県ですが、一番長く生活したのは東京です。

ヴァイオリンを始めたきっかけは

４歳の時、母が連れて行ってくれた近くの幼稚園での発表会でヴァイオリンが気に入り、その場で先生に「やりたい」と自分でお願いしました。常にクラシックが流れているような家でしたから、母もやらせたくて連れて行ったのだと思います。

ヴァイオリンの魅力は

とにかく音色です、音色を自分で造りだすことができるということですね。それに加え、技巧的に面白いことができるのも魅力です。

オーケストラにという気持ちはあったのですか

私は音楽高校・大学と専門の道を進みましたが、「一生音楽を」と思うようになったのは、実は大学も卒業し、パリに４年間留学した時でした。私にとって音楽は生活に無くてはならないものではありましたが、それを職業にという自信は大学卒業後すぐにはありませんでした。とにかく目の前のことをと考えて生活していましたから。

ソロと室内楽の勉強をずっと続けてきて、最近やっとオーケストラに自分の気持ちが向いてきたな、というのが正直なところです。子どもの頃からレコードなどで好んで耳にすることが多かったのはオーケストラ作品でしたので、現在こうしてオーケストラと関わることになったのも自然な成り行きなのだと思います。

札響入団のきっかけは

留学が終わって帰国し、大学で教えながらソロ活動をしながらも、オーケストラで弾く機会がここ数年は増えていました。そんな時に、元々ソロ活動でお世話になっていた事務局長の宮澤さんからお話を頂きました。宮澤さんは、私が留学から帰っていろんな音楽祭のオーディションを受けていた頃から、ずっと私の演奏を聴いてくれていた方で、大垣などの大きな音楽祭で私のアンサンブルを多く聴いていて下さった方です。最初お話を頂いた時は寝耳に水という感じでびっくりしました。自分のようにオーケストラの経験の無いものが大丈夫なのだろうかと悩んで、お引き受けするまでに随分時間がかかりました。音楽家人生にも大きな糧になると思いましたし、こんな大きなチャンスをみすみす見逃すのもと思い、お引き受けすることにしました。

北海道の生活に不安は感じませんでしたか

全く無いことはありませんでしたが、ヨーロッパでの生活を経験していましたので、気候風土がよく似ていることから、ヨーロッパのような生活ができると考えました。大都会なのに街がコンパクトであること、何度かゲストでよんでいただいた時に、北海道の人は外の人を受け入れるなと感じ、そういう所なら暮らせるのじゃないかなと思いました。

何か趣味はお持ちですか

子供の頃からよく美術館に連れていかれたので、絵画や彫刻など美術を鑑賞することが好きです。あとは、祖母から受け継いだものですが、切手と絵葉書きの収集をしています。

ソリストを務められるそうですが

１月30日の札響北広島公演でモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第４番を演奏させて頂きます。北広島の「花ホール」で弾きますので、多くの方にお聴き頂きたいと思います。　（佐藤良次）

from 「札響くらぶ」

ファンクラブ合同の交流会開催

日本プロオーケストラファンクラブ協議会設立会議終了後、場所を変えて、テラスレストラン・キタラにおいて交流会を行いました。この席には、札響音楽監督の尾高忠明さんご夫妻、コンサートマスターの大平まゆみさん、さらに札響事務局から西村専務理事、宮沢事務局長も参加され、楽しいひとときを過ごしました。当日の和やかな様子を写真でご紹介します。

編集後記

もうお馴染みとなりました、尾高さんによる来年度の定期演奏会プログラムの解説をお届けいたします。いつもながら、滑らかで流れるようなお話でした。記事とした以外にも、たくさんのお話があり、興味深いエピソードもお話いただきましたが、誌面の都合でそのすべてをお伝え出来なかったのは、本当に残念です。

今年度はキタエンコさんを始めとして、バボラークさん、パユさんと、豪華な客演が目を引きましたが、来年度も凄い顔ぶれです。特に、私のような世代にはサー・ネヴィル・マリナーというお名前は本当に懐かしいものです。尾高さんがロンドン響を指揮された時、クラリネットがあまりにも上手いので声をかけたら、マリナーさんの息子さんだったそうです。来年度も楽しみです。（佐藤良次）